

慶應義塾大学病院内で行うロービジョンケアの取り組みについて

日本盲導犬協会

金井 政紀

Background(背景)

日本盲導犬協会は 2024 年 4 月 1 日、慶應義塾大学眼科学教室と「ロービジョンケアに対するカウンセリング効果の研究」の共同研究を立ち上げ、大学病院内に「ロービジョンケア・ハブ」の名称で相談室を常設した。

Purpose(目的)

病院を訪れるロービジョンケアを必要とする人に対して、福祉、教育、就労、生活の工夫など様々な分野の情報を病院内で提供し、相談者の居住地域にある支援機関や団体へつなぐ取り組みを通して、眼科医療従事者と連携する盲導犬協会の意義(価値?)を報告する。

Method(方法)

週 4 回 10 時～16 時、視覚障害当事者の相談員とサポートスタッフの 3 名体制で対応。予約なし、相談費無料、同病院患者以外も相談可能。1 時間程度の相談のほか、極めて短時間で軽微な相談内容を合算した 513 名の相談内容を記録したデータから、利用者の傾向を分析する。

Outlook(見通し)

今回、調査データからも、眼科で診断を受けた患者が QOL 低下の不安を解消するために眼科で情報が得られるニーズが望まれていることが明確であった。

日本では、眼科で視覚障害リハビリテーションを提供する体制が充実しているとは言えず、患者は気持ちが沈み家に引きこもってしまったり、社会との接点を一時的に見失う状況に置かれることも多い。当協会では、視覚障害リハビリテーションを提供する部署で、白杖などの歩行訓練を行っており、盲導犬取得までをワンストップで対応できる特徴がある。眼科から早期に視覚リハビリテーションを受けて、盲導犬を希望する道のりは人によっては旅のようなものかもしれない。その最初の一步に当協会は患者と出会う価値がある。